

〈家庭の様子〉

- 会社員の父：多忙で、本人との関係が希薄である。
  - 専業主婦の母：心配りが細やかで、本人と二人でいることが多く世話を焼きがちである。
  - 兄：最近、同居する。運動にも勉強にも積極的で、本人とはよい関係である。
- ④ 指導援助の方針

〈高校の教育相談係 ⇒ 本人〉

- 定期的な相談面接を実施し、本人に自分自身を見つめさせる機会とする。
- 気持ちの安定を自分で図れるよう援助をする。
- 家族の協力、学校全体での取り組みを通して、多くの人とかかわりがもてるようにすることで、本人に自信をもたせ、自立心や社会性を育てる。

⑤ 指導援助の経過

自分が話したい人、自分を見てくれている人がいることの心地よさに気づき始めたI子

〈4月～8月〉

「今年は個別面接なので話しやすい。もっと早く話をすればよかった。でも、進路のことを考えると憂鬱」というI子の話から、教育相談係の教師Aは時間的にも環境の面からも、ゆっくり話せるように配慮した。また、教師Aは同じ教育相談係のベテラン教師Bからアドバイスをもらいながら、相談面接の方向性を探った。

相談面接を始めて1か月が過ぎたころから「頭が痛い。外出したくない」「近所の人目が気になる。みんな私のことを噂してるから……」とI子は自分の気持ちを話すようになってきた。また、頭痛が続くことから行動療法を取り入れ、気持ちの安定を自分で図れるように働きかけをした。

教師Aは、自分自身によりイメージをもてずに苦しんでいるI子に心理検査を実施し、結果からみられる長所を本人に伝えた。このことはI子を「自分のことをきちんと見てくれる人がいた。今

まで誰も私のことをどう見えるか話してくれなかった。私にもそんなよいところもあったんだ」という気持ちにさせ、勇気づけた。

気持ちや行動が外に向いてきたI子

〈9月～11月〉

母親から、話をしたいという手紙が届き、母親と相談面接を行う。

〈母親から見た本人の変化〉

- ・ 相談面接があった日には、元気に学校の話をすること
- ・ 自分の思いを聴いてもらえること、外でも一人でないと感じていること

家族、教師A、教師Bにとって、驚くことがあった。それは、友達と外出し、10年ぶりに映画を見てきたことである。自分から外に出たのである。最近、頭痛もなくなっているという。

担任や教科担当の教師から、文化祭への出品と進路セミナーへの参加を勧めたところ「自信はないけどやってみる」「就職について母や姉と話している」と迷いながらもどちらにも参加した。さらに「外に出ることも大切だし、経済的なことも考えるとアルバイトもしてみたい」と話している。

教師Aは、母親と2度目の相談面接を行った。

〈母親の思い〉

- ・ 外に出かけることを苦しなくなったこと
- ・ アルバイトも長続きしそうなこと
- ・ 明るくなったので「がんばって」ということばを親として言えるようになったこと
- ・ また立ち止まるかもしれないから、ゆっくり見守っていきたいこと

《学校でのよかったかかわり》

- 本人に今必要な支援の方向を設定し、教育相談係を中心として本人の思いを受けとめるかかわり、自分を見つめさせることで自信の回復を待つかかわりをした。